恋姫三國無双

KAERU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋姫三國無双

【Ｎコード】
Ｎ１４６６Ｚ

【作者名】
ＫＡＥＲＵ

【あらすじ】
いったいどうなるのか？
予言からはじまります

エピローグ（前書き）

恋姫の二次創作になります天のお使いが三人になりました、めちゃくちゃです。
作者は恋姫を知らないのでキャラ設定もめちゃくちゃ、いったいどうなるのか？
話しは予言からはじまります。
初めての投稿なので、もし読んで下さった方は感想やアドバイスをなんでもいいのでください。

エピローグ

～お告げ～

星の輝きの下、はるか北の空より、三つの星が舞い降りるであろう。
「一つは仁のお使い」
「白銀の衣を身に纏い、正しき心と意志を以って、
民を導く光とならん」

「一つは知のお使い」
「あふれる知力はとどまるところを知らず、あらゆる知謀と策略を用いて、
未曾有の危機を退けるだろう」

「一つは武のお使い」
「その力に優る者無く、類い稀なる武を以って、不毛の戦を終わらせるだろう」

「これら三人のお使いを従えし者、名声と共に国を成し天下無双の覇者となるであろう・・・・」

エピローグ2（前書き）

主人公紹介
北郷一刀　お馴染みの人？

オリ主
ダン＝クローズ
天才高校生

満木拳　みつるぎ　けん
強い　今のところ謎

エピローグ2

聖フランチェスカ学園
その剣道部に一人やたらとモテるやつがいた
彼の名は北郷一刀　名門聖フランチェスカ学園の学生である。成績は中の上
見た目はカッコイイしなんだかんだ中身もカッコイイなのに彼女はいないのは彼が女泣かせの鈍感野郎だからである。
一刀「あ～あ練習か・・・たるいなあ～」

A「お前主将だろが！しっかりしろよ、今年は県優勝狙ってるんだからな！」

一刀「わかってるって　まかせときな　主将として責任は果たす！」

A「どうかな　この前だって応援に来た女の子達から黄色い声援浴びて　鼻の下が地面にえぐりこんでたくせに　」一刀「いやどんな状況？って　ふざけんな！俺はそんな特殊人間じゃあね～！」
A「ハイハイそうですよね～一刀サンは我が剣道部一の実力者ですもんね～ソンナコトあるわけないですよね～」
一刀（ムカつく）・・・
「そういえば昨日クラスの女子から手紙もらったなあたしか#ちゃんだっけ？」

A「ままさか・・#ちゃん？！　　アアババババババババ」
　ぶくぶく

一刀「おおい！しっかりしろよおい！」？

一刀「しまった　#ちゃんはまずかったな　　あとで謝らなきゃ
#ちゃんはAが好きなのに　　あいつアワ噴いてたけど大丈夫か
？　ってやばい遅刻だ！乱取りしなきゃ・・・・・って・・・・」キュ
ーン

一刀「なんだ？　この鏡
なんか光って　　カチ

２２#####００！！！　　」

～ダン＝クローズ～

アメリカロサンゼルス近郊小さな家

ここに一人の天才高校生がいた　彼の名はダン＝クローズ　両親は
いない。
幼い頃に事故に遭い家族を失った　以来彼は母方の祖父に育てられ
今に至る。
学校での成績は下の方である。ブラウン髪で身長は低く、童顔なの
でよく小学生と間違えられるほどだ
ダン「じいさん　何とかしてくれよ！　エンジンがいかれちまった
　これじゃ学校に行けないよ。」

じ「やかましい！　学校何て行ってねぇだろうが！また探険とか言
ってどこぞをほっつき歩いとるんだろ」

ダン「歩いてないよ　走っているんだ」

じ「やかましい！屁理屈をゆうんじゃね～？？？？？だいたい、エンジンの仕組みぐらい知り尽くしておるだろうが！」

ダン「だから直してくれって頼んでるんだ。直す所教えるから」

じ「うちはパン屋だ！！」

ダン「そんなこと知ってるよ？　大丈夫　じいさん？」

じ（？？？？？？？？？？）「直し方分かるならお前が直せ！」

ダン「そんなこと出来るかあ！！僕の非力さをナメるなよ～この前なんて階段を一階から二階まで駆け上がっただけで太ももちぎれるかと思ったよ。実際今若干筋肉痛だよ？そんな僕が重い工具なんて使えると思う？　　エッヘン　　」

じ「エッヘンじゃねえ！ダン！もう少し真面目になったらどうだ？そうすればきっとお前の両親も」ダン「親の話しは止めてよ！！！！」

じ「ダン・・・」

ダン「・・・もういいよ、ゴメン怒鳴って」じ「いや・・・」

ダン「それじゃ僕は行くよまたね」

ダン「はあーやっちゃったよ・・・早く謝ろうトテトテ　カラ
ンカラン
ビクッ　　ななんだ鏡か、びっくりした」
キューン
ダン「え！　ひっ光ってる
キーーーン
う　うわ～～～～！！？」

～満木拳（みつるぎけん）～

「誰だ　そこにいるのは・・・・出てこい　　カチャ
・・・鏡・・か？　キューン　　！なんだ！
キーーーン
くっ　　前が　見え・・・」

三つの星が舞い降りる

エピローグ2（後書き）

ようは前書き見ればとくに見る必要ない駄文です。
三人がトリップしました。次回いよいよ恋姫の世界へ

それぞれの出会い（前書き）

オリ主説明　追加要素
満木拳（みつるぎけん）
身長高い　１８０くらい
武器：棒　（丈夫）
戦い方：基本的には棒術で戦いますが、素手でも戦います。（柔道とか拳法）

それぞれの出会い

～邂逅～

三人は舞い降りた。
そこは切り立つ一枚岩
しかし三人は出会わない。

～満木拳～

「・・・・・っく　ここは・・・どこだ？
（夜か・・・
しかし知らないところだ　たしか鏡から光が出てそれで？・・・）

ケン（あっちに森があるな、行ってみるか）
スタスタ

ケン（さっきは荒野だったが森の中は結構豊かだな・・・ここはいったい？あの鏡には人を移動させる力でもあったのか？

それともただ単に連れ去られただけか？
気絶していたようだし・・・しかし、だとしたら何のために？・・・・！）

ガサガサッ　　ワイワイ　ガヤガヤ

男達「へへっまた一つ村を潰してやったぜ　戦利品もたっぷりだ
ジャラジャラ
これで当分遊べるぜ～
ふんっ　村の女共め！思い知ったか！俺達をナメるからこうなるんだよ」

カエシテクダサイ

男「ああっ？」

女の子「返してください！それは村の人達の大事な宝物や食糧です？あなた達がむやみやたらに奪って良い物ではありません！」

男達「お　おい！女がなんか言ってるぞ？
な～にびびってやがる　平気だ　“この女は弱い”
それに檻の中だ
そ　そうだよな？　へへっ」ケン（見るからに盗賊・・・・だな
村がどうとか言っていたが？　ん？）

キャア！　　ドサッ！

男達「あ　頭きた！
お　襲ってやる！」

女の子「や　やめてください！どうしてこんな酷い事をするのです

か？！」

男「どうして？どうしてだと！　まただ！　またそうやって女は男をばかにする！　もう　うんざりだ！！」

女の子「ば　ばかにしてなどいません！こんなことをしていては、いずれ捕まってしまいますよ！」

男「捕まるわけないだろ、ここの領主は無能を絵に描いたようなやつだからな！」女の子（！！！）

ケン（あいつら相当女に恨みがあるようだな、どうする？盗賊なんてそう珍しいものでもないが・・・しかしなんだあの格好は？黄色い鉢巻きや黄色い頭巾、シンボルか何かか？　　！！マズイ！）

男「殺してやる！」

　男が突然剣を抜く

女の子「！イッイヤ！助けて！詠ちゃん！」

　　ドゴォォォ？

男「ぐはあ・・」ドサッ

ケンのこぶしが盗賊の頭にめり込んだ

男達「ててめえ！　いきなりなにしやがる！」ウオオオオオオ

男達が数人殴り掛かるが、ケンは気絶した男の足を掴み片手でほうりなげた

ギャー　途端に数人の男達は吹き飛ばされた

残った一人が持っている槍を構えている

男「お　大人しくしやがれえ？！」

男の構えは素人そのものだったよく見ると服は所々破け槍は刃こぼれがひどい

ケン「・・・もうやめろ」男「うるせー！お前もぶっ殺してやる！

ケンは背負っていた武器を抜いた

男「そんな棒っきれで何するつもりだ！うっウオオオオオ！？？？」

男はむやみやたらに槍を突いてきた

ケンは槍をいなし　側面に回り込むと、持っている棒を振り下ろした。

バキ！

男の槍は砕けて折れてしまった。男「うわあ！な　何で男なのにこんなに？」

ケン「おい！！」

男「ひっ！？」

ケン「失せろ！！」

ギャーー　化け物ー！

たっ助けて～～～！

男達は逃げて行った。

女の子「あ　あの！ありがとうございます　助けて下さって？」

ケン「なあ」

「はい」

ケン「ここは何処だ？」

女の子「・・・はい？」

「何処だと聞いている」

「こ　ここは擁州の西端、隴西省臨兆県北の山岳地帯です。」

（フエエ　こ　怖い顔？）ケン（・・・・意味不明だな、聞いたこともない地名だぞ、まさか・・）

「おい！」「は　はい？」ケン「今は西暦何年だ？」

女の子「えっ　あの？今は中平６年ですが？」

ケン「・・・・・・」

女の子「あの」

「なんだ？」

「貴方様のお名前は？」

ケン「・・・俺は」

女の子「大変！お怪我をしています」

「は？」

よく見ると肘が擦りむけている

女の子「すぐに手当を？　そうだ！これで」ビリビリ

「お　おい？」

女の子「これで良し？痛くないですか？」

ケン「ああ　すまん」

女の子「い　いえそんな／／／／」
ケン（さっきの戦闘での傷ではない・・・いったい何処で？）

それぞれの出会い（後書き）

先ずは満木が行動します。女の子はまあ　わかるよね

それぞれの出会い２（前書き）

ダン＝クローズ追加要素
武器：特に無し
容姿：見た目子供
中身　子供
ブロンド髪
目　一応黒予定
少年です。しかし１６歳そんなやついねーよ！は勘弁してください？

それぞれの出会い２

～邂逅２～

～ダン＝クローズＳｉｄｅ～

朝日が上り朝露が冷たく凍みる中　彼は目を醒ました。

ガバッ「うあああああアアアあああああアアアあっ　　こ

ここは？」

ダン「こ　こんな景色見たことないや？スゲーーー！」

彼は冒険心あふれる少年のような、見た目通りの幼さを持った青年だった。

ダン「うわっでっかい岩だなあ、びっくりしたよ・・・ん何の音？」

パカラッ　パカラッ

女「み～つ～け～た～～～～あああああい」

ダン「ギャ～～～～！」

　　ガシッ

女「いただき？」ダン「た　助けて？？助けて～～」　ジタバタ

女「ああ～もう、うるさい！暴れないの！」

ダン「貴女は誰？ここは何処？ぼくは一体これからどうな　－　バキン－　げふん」女「ちょっと！何するのよ，冥琳，　気絶しちゃったじゃない！」

冥「何言ってるのよ，雪蓮，！！！いきなり走り出したと思ったら、いきなり小さな女の子を誘拐するなんて、何考えてるのよ！
ほら？今のうちに元の所に置いて来なさい！」

雪「何勘違いしてるのよ、人を犯罪者みたいに」
冥「犯罪者じゃない！どう見ても！」

雪「違うわよ冥琳、この子よ私達の捜し物は？」
冥「！！まさか・・この子が？」
雪「ええ　間違いないわ！落ちてくるこの子をハッキリ見たもの！」
冥「でも？、」
雪「冥琳、私が信じられない？」
顔を限界まで近づける　冥「そ、そんなことは／／？」雪「そ、なら決まりね？さあ船まで連れて行くわよ！」

それぞれの出会い２（後書き）

ダンさんは連れ去られました。

それぞれの出会い３（前書き）

北郷一刀　追加要素
武器：竹刀（折れるけど）服装：例の制服
スペック：
　勝手に剣道やってる事にしちゃいました。でもまあそこそこの実力です。
てゆーか普通の高校生

それぞれの出会い３

～邂逅～

太陽は天頂に達した
外気は温められ　大地が渇く　そんな中彼は目覚めた

～北郷一刀Ｓｉｄｅ～
ギャ～～～～！
いただき？

一刀（・・・暑い・・あっつい）

一刀「・・んっ・・なんだ？って、な！なんだここは？！部室棟は？学園は？なんでこんな所に？」

一刀「まてまて落ち着け、し、竹刀は有るな？服は、学園の制服の

ままだし、・・・・たしか、Aと喋っててAがアワ噴いて　いやいや　そんなことはどうでもいい！　たしか、鏡が落ちてて　その鏡が光って　それから　「おい」　へ？」

男「てめぇ高そうな服着てるじゃねーか、よこしやがれ！！」　バシッ

一刀「わ！いきなりなにすんだ！誰だよあんた！」
小男「誰だとは失礼なやつっすね、兄貴を、俺達を知らないと言わせねぇっす」
太男「そうだぞぉ～～、俺達は泣く子も黙る黄巾軍の一員どぅあ～」
男「そして俺様は黄巾軍の大幹部、さあ身ぐるみ全部置いていきな！！」
　ドヤ～～～～～＾＾

一刀「・・・・・・・」

黄達「・・・・・・・」

小「兄貴、あいつ黙ってやすぜ？」
兄貴「フフフ、怖くて声も出ないのよ　　ドヤ＾＾」太男「あ～兄貴～あいつ逃げたよ～」　「何？！」
　スタコラ　　スタコラ

一刀「なんかよく分からんが、とりあえず逃げとけ！！」
　マテマテー
一刀「あ、追いかけてきたって！馬～～！？」

一刀追い付かれる↓

兄貴「ばかめ！逃げ切れると思ったか！」
小「あ、兄貴～～待って～？」ゼーゼー
太「ぜー、ぜー？あ、兄、？き」
兄貴「なんだなんだ？情けねぇなあー」

一刀「くそっ！」　シュー

兄貴「ああ？そんな木の棒で何しようってんだ？おいおまえら、やっちまえ！」小男「おら～～！」
　サッ
一刀「ヤアア！」ブン！
小男「ぐはぁ！いてぇ」
太男「ウオオオオオオ！」ぶん！
一刀「うわっ！」　バキ！
　竹刀、折れる↓

兄貴「ハ～ハッハッハ～、これまでだな、小僧！」

一刀「く、くそっ！なんとか防御したけど、竹刀が」
兄貴「さて、身ぐるみ置いていきな！そうすれば、命は助けてや「まてまてまて～～～～！！」た　ゞ、誰だ！！」

？「我が名は関羽！世が乱れる今、同じく民を按じる心を持った姉妹と共に、世の平定の為旅をしている！弱き民を脅かす不貞の輩め！我が青龍堰月刀のサビとなれ！！」　ドン！

兄貴「お、女？」
小男「兄貴、やっちまってください！」
兄貴「へ、おオオオオ～、し、仕方ねー逝くぞ！、あっ！間違った。行く「ヤア！」　ザシュ！」

小男「ギャ～～～～～！兄貴が斬られた～～！」
関羽「いや？服しか切って？」　タスケテーーー
　おい！俺様を置いて行くな～～～～！

一刀「たっ、助かったのか？「あの～～？」うわっ！いつの間に後ろに？」

？「こんにちは！」
一刀「こ、こんにちは・・・（かっかわいい／／／／）」？「私、劉備玄徳と申します。あの、貴方は天のお使い様ですよね？」

一刀「え！？」
劉「お願いします！私達と一緒に戦ってください！」　　お辞儀↓
一刀「えっ？えっ？」
？「鈴々からも、お願いするのだ！お願いしますなのだ！」お辞儀↓
一刀「劉備って、えっ？関羽って、えっ？エエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ～～～！！！」

一刀「それじゃ、整理するよ」
劉「はい」
一刀「君達の名前は劉備玄徳、関羽雲長、張飛翼徳、」
三人「はい（そうなのだ）」
一刀「君達はこの戦乱の世を治める為に、いろいろな所を旅してきた。」
三人「はい（そうなのだ）」
一刀「そんなある日、ある噂を聞いた。内容は、この戦乱の世を終わらせるため、空から天のお使いがやって来る。」
三人「うんうん（なのだ）」
一刀「その夜、星を見た。噂通り三つの星が北の方に落ちるのを見た。」
鈴「噂ではなく予言なのだ！」
一刀「・・とにかく、それを見た君達は急いで北を目指した。そして襲われていた俺を見つけて、助けてくれた。これでいい？」
三人「まったく持ってその通りです！（なのだ）」

関「いやー発狂なされた時は一瞬どうなるかと思いましたが、ご主人様がご理解の速い方で助かりました。しかし、さすが桃花様！！あっちに誰かいる気がする～　とか言った時は半信半疑でしたが、

こうして見事天のお使い様を見つけることが出来ました！」
鈴「さすがなのだ！」
劉「えへへー／／／」

一刀「・・・」
（劉備玄徳って聞いたことある、たしか世界史の、・・・三国志だ！三国志好きの先生がよく話してた！。　たしか、魏と呉と蜀って国が争っていた時代だ。　でも、劉備って男だったよな？それに関羽と張飛も！どうなってるんだいったい？！）
鈴「お兄ちゃん、お兄ちゃん」グイグイ
一刀「うわっ！って、お兄ちゃん？」
鈴「そうなのだ！お兄ちゃんの名前はなんてゆうのだ？」
一刀「俺？俺の名前は北郷一刀、君は張飛？だよね」鈴「そうなのだ！でも、　鈴々は鈴々なのだ！」

劉「！そうだ、真名をまだ教えてなかったね。」
関「そうでした！ご主人様！」
一刀「えっ？俺？」
関「はい！私の真名は愛紗と申します。」
劉「私は桃花だよ？よろしくね！」

愛「さあ、ご主人様の真名を「な、なあ」はい？」
一刀「マナって何？」
桃「真名を知らないの？」愛「なんと！！」
鈴「・・・？」

愛「真名とは真の名、則ちその者を表す大切な名の事です。むやみやたらに他人に教えるものではございません。」
一刀「そ、そんな大切な名前、俺なんかに教えて良いの？」

愛「もちろんです！ご主人様は天のお使い様で、私達を導く光なのですから！」一刀「ねぇ、さっきからご主人様って言ってるけど？誰のこと？」
愛「な、なにを言っているのです！貴方様のことに決まっているではございませんか！」
一刀「でも、俺はその、天の？お使いみたいな、大層なものじゃないよ！」
桃「ん～でも、その服を見る限り予言通りだし。」
一刀「いやっ、これはただのポリエチレンの制服で」鈴「ポリエ・・・なんなのだ？」
愛「なんですか？」
一刀「いやっ？」
桃「・・・・ねぇ、取り敢えず私達と一緒に行きましょうよ！歩いているうちに話しもまとまるわ。」
鈴「おなかすいたのだー」愛「確かに昨日からなにも食べていませんね。」

桃「ね！いこっ？」
一刀「う、うん」
（取り敢えず付いて行こう。またあんな奴らに襲われるのはゴメンだ）

それぞれの出会い３（後書き）

疲れましたかなり
小説になってるのかなこれ
次はダン＝クローズＳｉｄｅです。連れ去られましたよねダンくん

少年の夢（前書き）

ダン＝クローズ追加要素
武器：声（水の波動並）
特技：物事を瞬時に理解する事が出来る（ある程度）　計算（暗算）
ダンくん難しい！

少年の夢

～邂逅～

海に向かって漕ぎ出す船　揺れる波を風が撫でる。
少年は夢を見た
悲しい夢を
願ったのは　未知なる冒険

～ダン＝クローズＳｉｄｅ～

「ダン逃げろ！このシステムはもう持たない！」
「博士！システムオーバーフロー、自己崩壊を始めています！」
「こっちよダン！ここに入って！決して出ては行けません。いいわね？」
「いやだ！いやだよお母さん！お父さん！」
「ダン・・・生きて」
「いやだよ！いやだ～～～～！！」

ダン（いやだよ、いやだ・・・・・・・）
雪蓮「ちょっと！起きて！　起きなさい！」ビシッ

ダン「はっ！？こ、ここは？」冥琳「ふー、やっと起きましたね？」
雪「冥琳が強く叩き過ぎたのよ？まったく」
冥「うっ？すみません？」

ダン「あっ！貴女はさっきのお化け女さん！」
雪「なっ、なんですって～～～！！！？」
冥「・・・ぶっ（笑）お化け女さんて、ククク（笑）」
雪「め、冥琳？」

ダン「ここは、海の上？」冥「む、意外と冷静だな
だが少し違う、ここは呉群富春県から北の長江を上った途中、長坂に近いところよ。あなたのいた隴西からははるか西の地よ。」

ダン「長江って、川の名前だよね、すごいや！まるで海見たいに広い！」
雪「ちょっと！お化け女ってどういう意味よ！」
冥「まあまあ、落ちついて雪蓮　（笑）」
雪「冥琳！後で覚えてなさいよ？」
？「なにやら騒がしいと思ったら、なんの騒ぎじゃ　これは？」

雪「祭～この子ったらひどいのよ～　私が化け物だ～って」
祭「・・ぶっはっは（笑）これはいい、さすがに雪蓮殿もようやく主君として一皮剥けてきたという証拠じゃな？ぶっはっはっは（笑）」
雪「笑い事じゃない！
「あのー」何よ？
「ひい！怖い）　。０　。（ヒィィ
」あ？あんたまた？」

祭「お～ボウズ！目を醒ましたようじゃな。」
冥「？祭殿、この子は女の子ですよ？」
祭「何を言っておる、どこから見ても男ではないか。のお？」
ダン「はい男ですよ。」
冥＆ａｍｐ；雪「嘘～～！？」
祭「相手が男か女かも分からんとは、まだまだじゃな～お二人共？」
冥＆ａｍｐ；雪「め、面目ないわ？（ありません）」

ダン「それで結局、ここはどこで貴女達は誰なんですか？」
祭「うむ、ここはわしが説明しよう」

祭　説明中↓

ダン「・・・なるほど、判りました。」
祭「理解したか？」
ダン「はい！お使いの事、この世界の事、皆さんの事、真名の事、そして皆さんが僕を天のお使いと思っていること」
雪「間違いないわ！この目で見たもの！貴方が空から落ちてくる所も！」

冥「それを見て私達は貴方を捜して、見つけて、さらってきたのよ、雪蓮が」
雪「冥琳？あんたまた？？」アーダコーダ！
アーダコーダ！

ダン（・・・・タイムトリップ？でも、中平６年て　聞いたこともない年号だよ？。
こんな事ならハイスクールにしっかり通っておけばよかった？
・・・でもここは中国だって事は分かったよ。でも、僕中国語喋れないのに、何で言葉が通じるの？
それにあの人達、こんな大きな帆船とか、服とか見る限り、かなり身分が高そうな感じがするよ？なのに、この船、男の人が一人もいないし？　訳わかんないよ！）

祭「おい、大丈夫かおぬし？「でも・・・」　ん？」
ダン「めちゃくちゃワクワクする～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～！！！！！！」

雪「うわっ？」キーン
冥「なっ何？？」キーン
ダン「いったいどんな所なんだろ？中国大陸！
きっと珍しい物がいっぱい有るんだろうな～？
僕、知らない所を冒険するのが夢だったんだよ～？」

雪「今の、あの子の仕業？？」
冥「そのようね、なんて大きい声？耳が痛いわ
あら、祭殿はどこに？」
「こっここじゃ～？？」
雪「祭！大丈夫？」
祭「おお～～堅殿～わしはもうダメじゃ～？申し訳ありません。」
雪「私はお母さんじゃないわよ！？祭！しっかりして～～～～？？」
冥「祭殿！しっかり？」

ダン「楽しみだなあ？」

ダン＝クローズＳｉｄｅ　続く

少年の夢（後書き）

ダンくんは天才なのでこれで大丈夫なはず。
武器は声にしました
闘う機会は無いと思うけど次回はみつるぎに戻ります

独り、歩く（前書き）

ガンガン逝くぜ！
満木拳追加要素
容姿：イケメンではない　顔が怖い
　　声は低め
　　黒中心の服装
歳：一応２０予定

独り、歩く

～邂逅～

独りだった　それを望んだ
独りが好きなわけでは無い独りが良いと思っただけだ

～満木拳Ｓｉｄｅ～
女の子「あの、それで？あ、貴方様のお名前は？」

ケン「・・・人に名前を尋ねる時は、自分から先に名乗るものだ。」
女の子「そっそうでした？すみません？私はとうた、・・・」
ケン「・・？」
女の子「いえ？！・・・・と、董董・・と申します！」
ケン「とうとう？」
董「はい！それで、真名は月といいます／／／」
ケン「まな？」
月「はっはい？／／」
ケン「なんだそれは？」
月「ふえ？」
ケン「・・・少し整理させろ」

整理中↓

ケン「なるほど、真名か」月「はい、そして私は董董です。」　ズイ！

ケン（・・・明らかに偽名だが、特に言わないで於こうか。）

月「あの、それで？」

ケン「ああ、俺は満木拳と言う。真名は無い」

月「真名が無い？！そんな？」ショボン？

ケン「・・・だが、」

月「？？」

ケン「親しい者は、俺の事をケンと呼ぶ。そう呼べ」

月「ケン、様・・みつるぎケン様ですね？ありがとうございます！わたくしのことは、月（ゆえ）とお呼び下さい。！」

ケン「そのことだが・・・何故俺に真名を明かす？　大切なんだろ？真名は？」月「・・・ケン様はわたくしを助けて頂いた方です。そのような恩人に、真名を明かさないことは、かえって失礼になります。

ですから？、どうか真名をお受け取り下さい？」

ケン「・・ああ、分かった。」

月「お、お呼び下さい？？ケン様／／」

ケン「・・・ゆ、月？」
月「はい？？」

ケン（どうもこいつは苦手だ？・・・最初はただの村娘かと思ったが、整った服に丁寧な言葉使い、そして偽名・・・・訳ありのようだが・・・）

月「それにしてもケン様はこのような森の中でいったいなにを？見たところ荷物らしい物も特に有りませんが？」
ケン「荷物？　！！！
　　しまった！」
月「ふえ！なんですか？」ケン「いやっ、なんでもない・・・」

月「そ、そうですか？何かありましたら、遠慮なくおっしゃってください！。」ケン「ああ、
そういえば、もう朝だな。お前は
「ゆえです！！」
・・・ゆ、月はこれからどうする？帰る場所はあるのか？」
月「わたくしですか？わたくしは？」

オ～～～イ？

月「こ、この声は！詠ちゃん？！」

ゆえ～～～～！
ドコ～～～～！！ザッザッ

月「やっぱり！詠ちゃんだ迎えに来てくれたんだ？」
ケン（この足音・・５０人から６０人ほどか？
やはり月はただ者じゃないようだな・・・）

月「オ～～～イ！詠ちゃ～～ん！ここだよーー」

詠「月！」ガシッ
月「詠ちゃん、苦しい？」詠「ばかっ！どうして一人で出歩くのよ！」
月「ご、ごめんなさい
兵士の人を連れてくと、なんか窮屈で居づらく感じちゃって？」
詠「今度から外に行く時は必ず私に一言いってからにしなさい！！心配したんだから？！」
月「うん、ごめんね詠ちゃん？」

詠「大丈夫？ケガはない？近くの村が黄巾軍に襲われたって聞いて？私不安で　って！　何よここ！
めちゃくちゃじゃない！」
月「うん、実は黄巾の人達にさらわれちゃって？」

詠「なんですって！？
そいつらはどこ！取っ捕まえてギッタンギッタンにしてやるわ？」
月「大丈夫だよ詠ちゃん？この人が助けて・・あれっ？」
詠「この人？って、誰もいないじゃない。」

～ケンＳｉｄｅ～

詠ちゃ～ん

ケン「じゃあな・・・」

ケン（面倒事はもうごめんだ、迎えも来たようだし、もう特に危険はないだろう・・・用事も出来たしな。

ザッザッザッザッ？

バックを忘れていた？

ここに来た時に一緒に来ているかもしれない。

すっかり忘れていた、あの中には・・・　　くそ！）

ケン「マズイな、どっちから来たかわからない？」

（もう昼頃だ速くしないとバックが誰かに！）

ザッザッザッザッ？

ザッ

ケン「あった！あれだ！」（あの岩は見覚えがある、ちょうど倒れてた場所だ）

ザッザッ

ケン（たしか、起きた時はここの辺りだ！

くそ！何も無い！誰かが持って行ったのか？

それとも一緒（この世界）に来なかったのか？

いやっ、武器は有るし、一緒に付いてきた可能性は高い！すると誰

かが？）

ケン「起きてから半日以上は経っている、今更捜すのは無理か・・・
あの中にはあれが！
・・・・いや・・あれはいずれ棄てるべきものだったんだ・・・・
早めに無くしただけか・・・・
ん、あれはなんだ？」

ケン「これは！竹刀の束の部分だ！
よく見れば、争った形跡があるな・・・何かあったのか？・・・三
人ぶんの足跡と、四人ぶんの足跡が在るな。三人は逃げるように、
四人はまとまって歩いているな
ん、あれは？馬の足跡だ
えらく急いでいるな。」

ケン（・・・逃げるような三人の足跡が気になるな、ダメで元々だ
方角がわりに足跡をたどろう。
はー、こんなことなら、
月と一緒にいればよかった？？
・・・・・独り、か・・）

～月Ｓｉｄｅ～

月「・・・・しゅん？」

詠「お、落ち込まないで月?きっと急ぎの用事でもあったのよ!」
月「うん?」
詠（・・・まったく、どこのどいつよ?月をこんなに落ち込ませて?
いくら月の恩人でも許さないんだから!!）

月（ケン様、どこに行っちゃたんだろ?まだ何もお礼していないのに?

でも、あんなに男の人とお話ししたの始めて／／
男の人と真名を交換したのも初めてだなあ～
闘っている時はすごく怖かったし?ちょっと顔も怖かったけど、
話してみるとそうでもなかったし、それに、なんかとってもふわふわした気分になったなあ～
・・・また　お話ししたいなあ／／／／?）

～満木拳Ｓｉｄｅ～　続く

独り、歩く（後書き）

まだまだ物語は序盤の序盤です
みつるぎさんは二十歳です、予定はね
顔はイケメンではないです、コワモテ気味　でもいい意味で男前です。
声は低め
こんなかんじ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1466z/

恋姫三國無双

2011年12月8日00時47分発行